

---

# 「幸福の王子様」

リュシフェル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「幸福の王子様」

### 【Nコード】

N3330C

### 【作者名】

リュシフェル

### 【あらすじ】

墮天使ルシファーこと、リュシフェルの小さな小さな物語。天上界から、人間界へ。大天使長ミカエルこと、大和田と母上様の策略。そこで、ちいさなちいさな少女と出会う。そこから、始まる、奇跡の物語。

## 幸福の王子様

### リュシフェル

「ルシファー、すごくいい提案がある」

「てめえ、何度言ったら分かるんだ。俺の名は、リュシフェルだ」

「分かった、分かった。怒るなよ。お前が、怒ると何が起こるかわからない」

「お前？」

「分かった。リュシフェル、すごくいい案がある」

「面倒くせえ」

「いいから聞いてくれ、永遠の幸福を手に入れてみたくないか？」

「別に」

「いいから聞いてくれ、お前の母上も、賛成してくれた」

「俺には、父親も母親もいねえ」

「いや、実はいるんだ。お前の母上役に、選ばれた女性が」

「あれだろ、俺がガキの頃、会ったことがある、みんなに母上様と  
か言われていた女だろ。確か、天上界の、女性では一番能力の高い」

「ああ、だから今度は、大丈夫だ」

「あのな、大和田。お前は、俺が登場するまで、天上界で、神をも  
超える最上級天使だったんだろう？名は、ミカエル。まあ、お前は、  
ミハエルとか名のつてたけど。それが、俺と俺の味方達を、敵にま  
わし、俺との争いに敗れ、とりあえず、最後のチャンスが与えられ  
た。それが、ヘロデ王。バベルの塔だっけ、お前は、どんだけ、失  
敗し、落ちぶれるつもりだ」

「お前だって、墮天使になっただろう」

「それをお前が、宣伝したと。リュシフェルが、墮天使ルシファー  
になって、永遠に地獄行きだと。あのな、大和田、俺は、地獄へは  
観光旅行に行ったんだ。ちらほら、用事もあつたし。一度は、行っ

てみたいと思つてたし。楽しかったよ、地獄行きも。まずは、賽の河原にいた鬼どもを、みんなぶっ飛ばし、そこにいた子供達をみんな天上界に送り、最深部にいたヒロユキもぶっ飛ばした」

「ちよつと待て、お前、ヒロユキに勝てたのか」

「ああ。ちなみに地獄の案内役が、サダム・フセインって名前だった」

「そつ、そうか、それなら大丈夫だ」

「まあ、もちろんぶっ飛ばしといたけどな。サダム・フセイン、正体は、大魔王サタンだろ？ダを夕に直すと、サタンという名が隠れてる。簡単なクイズだ。くだらない命名だな、大和田」

「ちよつと待てつ、何で分かったんだ」

「ちゃんと調べといたぞ、大和田。大天使長ミカエル、後の大和田の部下サダム・フセイン。お前が、天国と地獄を支配するために、地獄に送りこんだのが、サダム・フセイン。後、大魔王サタン。サタンが言つてたぞ、大和田、無限地獄だけは勘弁して下さい。大魔王は、俺が任命することにした。もう、誰にするかは、決めていく」

「ちよつと待てつ」

「俺が、未来を予言してやるよ大和田。お前は永遠に、無間地獄行きだよ。そこで、永遠に拷問を受ける。それが、お前の運命だ大和田。で、いい提案てのは、何だ、大和田」

「いや、無間地獄行きは、勘弁してくれ。それと、母上様の提案なんだけど。だから、さすがに今回は、大丈夫だ」

「お前の大丈夫は、ろくなことがねえ。違うか？大和田」

「さすがのリユシフェルも、今度ばかりは、駄目だろうな。クックツク」いざ、人間界へ。

ここは、どこだろう？少なくとも、日本ではない。多分、ヨーロッパの田舎だろう。教会が見える、小高い丘の上まで、つれてこられた。大和田が、母上と真剣に計画を練っている。母上（血は、つ

ながつてないけど）は、俺が前に、会った時とは、まるで別人。そう、まるで、ただのしわくちゃババアだ。どうなっているんだ？どうやら、計画が練れたらしい。母上が、どこかへ行く。

「リュシフェル、そこにある台の上に、乗ってみろ」

と、大和田が言う。ちゃっかしスーツなんか着ている。

「面倒くせえ」

といいながらも、ちゃっかし台の上に乗る。

「これから、リュシフェルを固めていく。何か、言い残したことはあるか？」

「俺の、名前はどつするんだ？」

「お前の好きな名でいいだろう」

「じゃあ、名前は、幸福の王子様で。大和田、これが、お前の言う永遠の幸福か？」

「ああ、お前は、ここで固められたままで、永遠の時を過ごす」

「ふーん、まあいいや。固めてミソ」

すると、台座の上にある、俺の足が、銀色に輝きながら固まっていく。ピシ、ピキピキ。少し、抵抗してみる。ピシ。なんだ、どうやら、いつでも抜け出せるみたいだ。所詮、大和田や、母上の立てる計画なんて、こんなもんだ。ジャキーン。全部、固まった。銀色に輝く俺の体には、いろいろな宝石がちりばめられている。

「さすが、リュシフェルだな。少してこずったが、これで終わりだ」こうして、俺の体は、教会の見える小高い丘に、安置されたのでした。その像の名は、「幸福の王子様」

銅像になり、俺は何もすることがない。小高い丘から、教会を見下ろす。教会から、一人の少女が出てきた。かなりいじけながら、トボトボとこちらへ、歩いてくる。肌は、褐色でまだ5歳か6歳くらいだろう。俺の足元まできて、目を見張る。

「ありー、こんなところに銅像さんがいるやい、何やるりんやいね。幸福の王子様って書いてあるやいね。ありー、キレイやい、かつこ

いいやい。前まで、いなつかつたりんやいけどね。幸福の王子様や  
いか、ナディアやい、よろしくお願いでござんすやい。ナディアさ  
ー、教会さんに入れないりんやいよ、肌が白くないから、立ち入り  
禁止らしいやいよ。まったく、あつちよんぶりけつやい。じゃあさ  
ーナディア仕事があるから、もう行くやい。また、来るやい。バイ  
バイやい」

そっぴい残して、少女は去つていった。

(あんなちつちな子供がする仕事つてなんだろう?)

「マツチいりませんかやい、マツチいりませんかやい」

(マツチ売りの少女かよ)

「マツチいっばいありますやい、マツチいっばいありますやい」

だが、マツチはぜんぜん売れない。俺の小説みたいだ。しかも、

「どけつ、混血のガキがっ」

「子供がこんなところで何やつてんのよ」

と、心無い大人たち。それでも、ナディアは、

「ごめんなさいやい、ごめんなさいやい」

と、言いつつけなげにがんばる。もう、俺には見てられなかった。

ナディアは、やつと家へ帰る。

「母上様やい、マツチちよつと売れたやい」

「まだいっばい残つているでしょうが」

「ごめんなさいやい。また明日売るやい。おやすみなさいやい」

母上は、こんなところにいた。また、仮病の心臓病だ。大和田は、  
どこかというと、どうやらこの町の市長らしい。権力狂いのあいつ  
らしい。母上と大和田の計画には、ひとつ間違いがある。それは、  
ナディアを巻き込んだことだ。そして、高倉夫妻が俺の元へ来た。  
俺なりに、抵抗を試みることにした。

「よつ、高倉さん」

「リュシフェル君、また一人で行動しないでください」

「まあまあ、それはいいとして」

「よくないわよ」

と、高倉さんの奥さん。

「ごめんなちゃい」

と、俺。高倉さん夫妻は、天上界の人間なので、普通に話せる。

「明日の朝、多分、マツチ売りの少女ナディアが、ここにやってくる。だから、それまでに、大和田と母上のことを二人で、調べといてくれ」

「もう、調べときました。両方とも、救いがたい」

と、高倉さん。

「じゃあ、俺の体に、くっついてる宝石を明日の朝、ナディアにあげるということで」

「わかりました」

「わかったわ」

「幸福の王子様、おはようございますりんやい」

「おはよう、ナディア」

「ありー、しゃべったやい」

「面倒くせえ」

俺の本領発揮。ウオー。おっと。ピシ。ピキ。意外とあっさり俺は、俺の能力で自由になった。

「ナディア、何か望みはあるかい？」

「ありー、望みやいか。母上様の心臓病を治してほしい、でござんすやい」

(そうか、母上は、とうとう俺の敵にまわったか)

「ナディア、あれは、仮病だ」

「仮病ってなんやらりんやいね」

「うその病気ってことだよ」

「ありー」

「ナディア、今、いくつだい」

「えーと、5さいか、6さいやい」

「そっか、ほかに望みは、あるかい？」

「白人になりたいやい。そうしたら、教会さん、入れるやい」

「ほかにほ？」

「とくに、ないやい。あ、あと幸福の王子様がひとりぼっちじゃないほうがいいやい」

「そっか、俺、本名リュシフェルっていうんだ。歳は、十三歳から十五歳。よろぴく。君の願いをかなえよう。君は、これから天使になる。もう、働かなくていいよ。自由に生きていきなさい」

「ありー、じゃあさ、馬鹿リュシフェルのそばにいても、いいやいか？」

「ああ、君がそれを望むなら」

こうして、この物語は、終わります。ちなみに、大和田と母上は、高倉さん夫妻の望みどおり無限地獄送りになりました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3330c/>

---

「幸福の王子様」

2010年10月8日15時33分発行